

第1節:グローバル化は、なぜ無限競争を生み出したのか……………尹世炳(韓)

第2節:何が東アジアの人びとの安定した生活を脅かしているのか……………郭陽(中)
……………笠原十九司(日)

第3節:歴史認識の対立をどのように和解につなげるのか……………本庄十喜・大日方純夫(日)

第4節:東アジアの平和のために何ができるのか……………俵義文(日)

第1節:グローバル化は、なぜ無限競争を生み出したか

グローバル化は私たちの身近な暮らしとどのようにつながっているのか、という最初の問いかけに対しての記述としてはスポーツと中国のイベントが「身近な」ものでしょうか。もっと毎日の生活の中で世界とむすびついているものをとりあげたらどうでしょうか。

次の問い「なぜ無限競争の時代になったのか」という問いかけに対して、ここに記述されているのは、中国が経済大国になった、ということだけのようです。問いの答えになっていないような気がします。

次の問い「グローバル化はどのような宿題を残しているのか」は、いくつかの問題をとりあげていますが(格差の拡大、通貨危機、環境汚染、多文化共生の問題)が、どのように解決していけばよいのでしょうか、と突き放した書き方で終わらせています。これではそれこそどう解決していけばいいか、の手がかりとはなりません。

第2節:何が東アジアの人びとの安定した生活を脅かしているのか

この節の冒頭には「今世紀初頭に東アジアの人びとが安定した生活ができるようになった」と書かれています。表題とは矛盾です。

最初の問い「世界経済の重心が東アジアに移れば、私たちはより安定した生活を送れるのか、というのですが、書かれていることは「生活の向上」であって、安定とは少し違うような気がします。

次の問い「繁栄する経済の基盤はどこにあるのか」に対しては、東アジアの経済一体化がすすんだため、という説明ですが、中国で自動車の保有が増えていることだけの説明しかありません。

次の問いがこの節の題名ともなっている「何が東アジアの人びとの安定した生活を脅かしているか」ですが、これに脅威を与えるものとして台風・地震・津波などの自然災害をあげています。また新型コロナの影響にも触れていますが、人為的「ハリケーン」と名付けた政治、経済、軍事、社会などの「人為」的ハリケーンについては具体的な説明はありません。

この節の最後の問い「東アジアの人の生活の安定をどう守るべきか」では「協力の必要」を力説しています。それはその通りですが、最後の一文「私たちがどのような努力をすれば・・・生活の長期的な安定が確保できると思いますか」で終わるのではなく、もう少し結論的な言い方がなかったのか疑問です。

第3節：歴史認識の対立をどのように和解につなげるのか

この節の題名は、私たちが東アジアの平和をどうつくりあげていくのか、という根本問題のテーマです。最初の問い「少女像は何を象徴し、なぜ世界中に設置されたか」ですが、日本軍「慰安婦」問題を的確に説明しています。戦争と女性の人権問題としても国連でのいくつかの決議もとりあげられていて、理解の助けになります。この問題は第Ⅱ部第2章第3節でもとりあげられています。合わせて読むとよいでしょう。

次の問い「強制連行・強制労働の問題は、どのように解決できるのか」です。日本での中国人強制連行・強制労働問題は、日本の若年労働力の不足を補うため、1942年の閣議決定「華人労務者内地移入に関する件」がきめられたからです。これを提言した請願を出したのは、当時の地崎組の地崎宇三郎です。このことにもふれていただきました。また、ここで西松建設の和解の動きに触れられていますが、その後三菱鉱業(今の三菱マテリアル)も中国人強制連行被害者と和解しています。このことにも触れてほしかった。西松建設は2010年当時、小沢一郎氏との金銭癒着問題のスクandalを少しでも軽減しようとしての和解であったし、三菱マテリアルも中国市場を確保するために「今謝っておいたほうが中国で仕事がしやすい」という企業の論理が優先したものです。しかし、強制連行を謝ったのは、いずれにしても良いことです。他の企業も習うべきだし、何より、日本政府の態度が注目されます。

この節の最後の問い「なぜ歴史を学ぶのか、どのように歴史を学ぶのか」もドイツ・フランスの共通教材、バルカン半島の共通教材などの例があげられ、この本の東アジアの歴史対話がとりあげられています。この節の最後の文「東アジアの歴史的葛藤の解消と平和のために何ができるのか考えてみましょう」という文の答えは決まっています。それは「日本政府の事実を認めた誠意ある謝罪」です。そのために私たち日本国民は「謝罪する政府」をつくるために努力を続けることです。

第4節：東アジアの平和のために何ができるのか

中高生は「歴史問題」をどう見ているのか、という問いに対しては、文化交流だけでなく、歴史をめぐる対話の重要性についてふれています。これはこれで良いと思います。

次の「中高生たちはどう『歴史』にむきあってきたか」では、「東アジア青少年歴史体験キャンプ」、高知県の「幡多高校生ゼミナール」、「東アジア共同ワークショップ」、「希望のたね募金」が紹介されていますが、東アジア青少年キャンプ以外では中学生の参加はないと思います。

次の「歴史について三国の中高生は何をどう語り合ったのかは、東アジア青少年歴史体験キャンプ」のとりくみと中高生の声を紹介しています。これを読んだ中高生がどう考えるかが重要だと思います。てがかりになるとよいです。

最後の問い「東アジア、そして世界の平和な未来を共にいかにしてつくっていくのか」というものですが、「希望のたね基金」の活動に参加した学生の感想を載せています。現在の気候変動の問題を例にどう行動すべきか、というするどい問いとなっています。この提起のように本書が多くの若者に読まれ、考える基礎となることを願っています。

コラム「李秀賢」

よく書けていると思います。欲をいえば、追悼碑の写真、もう少し大きくして、文字が判読できるとよかった、とも思います。

コラム「スポーツで近づく南北朝鮮」

南北朝鮮のスポーツ交流ですが、昨年北の政府が韓国を敵対する別の国家、と認定し、統一の対象としない、と宣言したので、今の情勢と書かれている内容との違いは仕方ないのかもしれませんが。今年三月アジア女子サッカー大会に訪韓した北朝鮮のチームは、入国時に「朝鮮民主主義人民共和国のパスポート」を提示しました。国と国にとの関係である、という意思表示のようです。どうなるのでしょうか。

コラム「国境を越えるアニメ・ゲーム・K-pop」

私には、これを評する自信がありません。日本の若者文化もどうなっているのかよくわからないのに、韓国・中国の状況などよくわかりません。中国の店でガンダムに関連商品がすぐに見つけられる状況なののでしょうか。